

## 3-2 インタビュー調査結果

### 1. プロフィール

プレインタビューを10名を対象に実施し、グループインタビューを14名を対象に実施した。インタビューを実施した24名のプロフィールは以下の通りである。

#### (1) 年代

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	合計
既婚	3人	3人	2人	2人	2人	12人
未婚	3人	3人	2人	2人	2人	12人

#### (2) 職業・婚姻状況・子どもの有無

特 性	人数	
仕事(正社員又は自営業者)についている	24人	
結婚経験がある	16人	
離婚経験がある	4人	
子どもがいる	10人	重複あり

#### (3) 調査の内容

プレインタビュー及びグループインタビューにおける調査内容は、下記の通りである。

- ・経済的な役割について
- ・仕事など社会的な役割について
- ・家事の役割について
- ・恋人や夫婦間の主導権役割について
- ・相談することについて
- ・結婚について
- ・育児や育児休業取得について
- ・定年・老後の生活の希望について

## 2. 調査の結果

本調査において、男性の日常生活の意識・行動と関連する性別役割分担に関する意識として「主導権役割志向」「経済的役割志向」「日常生活依存志向」「社会的役割志向」「私的感情の抑制志向」の5つの志向性について検討しているため、それぞれについて、以下インタビュー結果を整理する。また、性別役割分担意識に関する志向性のほかに、年代により育児や老後に関して質問している。

#### (1) 主導権役割志向

主導権役割志向とは、例えば「妻や恋人には、できれば自分の意見に従ってもらいたい」「(結婚したら)妻には自分の(家の)習慣(やり方)に合わせてほしい」「妻や恋人が自分の思い通りにならないと、イライラすることがある」「結婚生活の重要事項は、妻ではなく自分が決めたい」「家庭のこまごました管理は、妻にしてほしい」といった意識があり、男女の関係性において重要事項を決めるのは自分にあり、妻や恋人を従わせるという傾向や、家事や介護は妻にまかせたいという志向性を示している。

そのような主導権役割志向については、主に以下のような意見があげられていた。

#### ◆ 主導権役割志向が強いケース

- 妻との関係で、家庭における重要事項については話し合いで決めている。しかし、より重要度が高い事項（大きな買い物、引越し等）について意見が食い違った場合には、妻に従ってほしいと思う。（20代・既婚）
- 自分自身は正社員で仕事をし、妻は専業主婦であるが、役割分担を意識しているため、妻には自分の意見に従ってほしいと思う。（30歳代・既婚）
- 将来結婚した場合には、妻には、できれば自分の意見に従ってほしいと思う。具体的にイメージがわからないが、全面的に自分に従ってほしいと思う。これまで交際した相手もそうした意識を持っていたと思う。（30歳代・未婚）
- 夫唱婦随という言葉があるが、家庭では重要度のレベルに応じて自分がリーダーシップを発揮する領域を決めている。食事のメニューにしても「野菜中心で健康に留意した献立にしよう」と私が決め、妻はそれを踏まえて材料やメニューを考える。何もかも細かなところまで男性が口を出すべきではない。男性は大きな方針（総論）を示し、女性はそれに基づき各論で対処するという構図がよい。台所、洗濯など妻がプライドを持ってやっているところは、一切口出しせず、褒めて感謝の言葉を出して労っている。（40代・既婚）

#### ◆ ライフステージ、経験等により主導権役割志向が変化するケース

- 妻は現在子育て中の専業主婦であるが、妻が子育てに疲れ果てた状態を通じて、家事についても積極的にシェアし、お互いに助け合いの気持ちを大切にするようになった。ライフステージにより、妻に従ってほしいという考え方も変化するのではないか。（30歳代・既婚）
- 確かに、結婚したての時期は、自分の理想として「妻に従ってもらいたい」と強く意識していたこともあったが、現在は結婚から数十年が経過し、これまでの様々な経験から、互いに仲良くやっていくには、そうした意識は阻害要因となることを学んだ。そのため、現在では「妻に従ってほしい」というような意識は、ほとんどなくなった。（50歳代・既婚）

#### ◆ 主導権役割志向が弱いケース

- 妻は現在専業主婦で、妻の性格は主導権を取るタイプ（姉さん女房）のため、自分はそれに従うという役割になっている。「妻には自分の意見に従ってほしい」という意識はほとんどない。（20歳代・既婚）
- 妻を対等なパートナーとして捉えているため、一方的に妻に従ってほしいという意識はない。様々なことについて、話し合いを大切にしている。何か問題があれば、互いに話し合いをして決めている。（20歳代・既婚）
- 自分自身も妻も、フルタイムで就業しているため、家事は話し合いによりシェアし、家庭内でも対等なパートナーという意識を持っている。（40歳代・既婚）
- 職場では、女性も男性も対等とする価値観がある。自身の意識も、女性は完全に対等なパートナーという考えである。（50歳代・未婚）

## (2) 経済的役割志向

経済的役割志向とは、例えば「(結婚したら) 家族を養い守るのは、自分の責任である」「子どもに手がかかるうちは、妻に働いてほしくない」「(結婚したら) 妻にはあまり稼いでもらう必要はない」といった意識があり、家族を経済的に支え、家族を守る役割は自分にあり、妻に働いてもらうことはあまり期待しないという志向性を示している。

そのような経済的役割志向については、主に以下のような意見があげられていた。

### ◆ 経済的役割志向が強いケース

- 幼少の頃から、厳格な家庭で育ったため、男は家族を経済的に養うのは当たり前であって、妻には働いてほしくないと思う。妻が働いている方もいるが、それは恥ずかしいことだと思う。(20 歳代・既婚)
- 妻はパートで数万円程度稼ぐことで精いっぱいであるため、私自身がしっかりして家族を養っていないと、という意識が強い。(30 歳代・既婚)
- 家計を支えるという最低限の水準ではなく、家族にも他人と比較してより豊かな生活を送らせてあげたいと思う。これが男としての器量ではないか。十分な収入を家計にもたらすことで、家庭でも、自分勝手なわがままを受け入れてもらえることが多い。十分な収入を稼ぐことは、家庭において夫・父として尊敬されるためにも大切なことだと思う。(40 代・既婚)

### ◆ ライフステージ、経験等により経済的役割志向が変化するケース

- 子どもが生まれてからは、私の収入で家族を養っているため、「しっかりと稼がなければならない」という意識が強くなってきた。子どもが生まれ、妻が専業主婦になったことが影響して、経済的役割の意識も変化してきたと思う。(20 歳代・既婚)
- 以前は妻も仕事をしていましたが、出産をきっかけに仕事を辞めた。私の意識として「家族を養い守るのは、自分の責任である」とはあまり思わない。私が会社を辞めて、収入が少なくなれば、妻が働けばいいと思う。経済状況により妻にも仕事をしてもらいたい。(30 歳代・既婚)
- 経済力が十分でなかった時期には、妻も仕事をして家計を支えてもらったが、ある程度経済力が安定すれば、妻は専業主婦となり自分一人の収入で家族を養うようになった。ただ、私の場合、「男は経済的な役割がある」とする意識はないかもしれない。状況に応じて、柔軟にやっていけばよい。(50 歳代・既婚)

### ◆ 経済的役割志向が弱いケース

- 自分の収入だけで生活していけなければ、妻も仕事をして共働きでやっていけばいい。現在の雇用状況では、終身雇用も難しくなり「男が家族を養う」のは無理があるため、2人で稼いでいけばいいと思う(30 歳代・既婚)
- 将来結婚した場合には、妻も仕事をして経済的には2人でシェアしていきたい。私の母が仕事をしていたため、女性も家庭を支えるために外に出て働くことは望ましいと思う。(30 歳代・未婚)

### (3) 日常生活依存志向

男性の日常生活の依存志向とは、例えば「家族の洗濯物を干すことは、自分がするような仕事ではない」「スーパーマーケットや商店で野菜や肉、魚などを買うことに抵抗がある」「妻が仕事を持つのは、家族の負担が重くなり、よくない」といった意識があり、家事をはじめとする生活全般について家族に依存し、自分がやることを避ける志向性を示している。

そのような日常生活依存志向については、主に以下のような意見があげられていた。

#### ◆ 日常生活依存志向が強いケース

- 妻は専業主婦であるため、日常生活のこまごまとしたことは、妻に全てやってもらいたいと思う。しかし、仮に妻が仕事を持てば、私も家事をやるべきだと感じている。(30歳代・既婚)
- 妻は出産、子育てをきっかけに仕事を辞めたが、子育ても大変な仕事であるため、家事については話し合いをして役割分担をするようになった。しかし、将来子育てが一段落した場合には、私は家事をやらなくなると思う。(30歳代・既婚)
- 日常生活のこまごまとした家事は、妻と役割分担をしている。炊事、洗濯、掃除などは、全て妻が行っており、私は蛍光灯の交換、パソコンの設定など、妻ができない部分だけ行っている。(40代・既婚)
- 妻は専業主婦であり、性格は几帳面で、気がきくタイプである。そのためか、日常生活の家事はほとんど完璧にやってくれており、結婚以来、私は妻に全て任せている。もし、妻がいなくなったら、大変困るだろうし、今は考えたくない。(50代・既婚)

#### ◆ 日常生活依存志向が弱いケース

- 毎日の家事も妻と話し合いをして男もやるべきだと思っている。そのため、日ごろから家事を手伝い、自分の役割を果たしている。(20歳代・既婚)
- 妻は気が強い性格のため、ある程度の量の家事をやらされている。仕事は言い訳にできないため、できるだけ手伝っている。(20歳代・既婚)
- 独身生活では身の回りのことを全てやっているため、結婚した後も一通りの家事はできる。将来は話し合いのうえ、家事の役割分担をしたいと思う。(30歳代・未婚)
- 妻はフルタイムで仕事をしているため、家事については話し合いをして役割分担し、シェアしている。妻のこだわりのあるものとして「洗濯物をたたむこと」があるが、それは夫である私にはやらせてもらえない。(40歳代・既婚)

#### (4) 社会的役割志向

社会的役割志向とは、例えば「仕事では競争に勝ちたい」「仕事で業績を上げ評価されたい」といった意識があり、仕事における業績について評価されたい、社会的に活躍したいという志向性を示している。

そのような社会的役割志向については、主に以下のような意見があげられていた。

##### 社会的役割志向が強いケース

- 今の会社では、チームで実施する業務が多く、一人勝ちするような意識ではうまく仕事が進まない。そのため、自分だけが競争に勝ちたいとする意識はないが、周りとの連携を組んで、仕事を円滑に行い、お客さんから評価され、お客さんに喜んでもらえるような仕事をしていきたいと思う。(20 歳代・既婚)
- 勤務先では、努力してもそれほど収入には反映しない。そのため、良い仕事をして評価されたい、とする意識は強いが、業績を上げて収入を上げたいとする意識ではない。(20 歳代・未婚)
- 専門職であるため、努力が報酬に反映されることもあり、仕事で評価されて収入を上げたいとする意識は強い方だと思う。(50 歳代・既婚)

##### 社会的役割志向が弱いケース

- 仕事で業績を上げて評価されるよりも、周りとの仲良くやり、充実した生活を送りたいと思う。(30 歳代・未婚)
- 社会的に活躍するよりも、自分が納得できる仕事をしたいと思う。もし、それでうまくいかなければ、妻に働いてもらえばよい。(30 歳代・未婚)
- 子どもが 20 歳を過ぎたため、現在は、仕事で業績を上げるよりも、自分が満足できるやりがいのある仕事をして、楽しい仲間と囲まれて過ごしていきたいと思う。(60 歳代・既婚)

## (5) 私的感情の抑制志向

私的感情の抑制志向とは、例えば「悩みがあっても、気軽に誰かに相談しない」「自分の素直な気持ちを他人には話さない」「他人に弱音を吐きたくない」といった意識があり、悩みを他人に打ち明けたら、相談したり、弱音を吐いたりといった、プライベートな感情を見せない志向性を示している。

そのような私的感情の抑制志向については、主に以下のような意見があげられていた。

### ◆ 私的感情の抑制志向が強いケース

- 私的な悩みは他人には話さないと思う。他人に話しても解決にならないこともあるが、他人から「それは違う」とか、「こうすべきだ」などと言われると、自分のプライドが傷つけられる。私的な度合いが強ければなおさら、プライドが傷つけられるため、相談はしたくない。(30歳代・既婚)
- 私は、私的な悩みは決して他人に話さない。それは、他人に話しても何の解決にもならなかったという経験があるからである。(30歳代・未婚)
- 「男は弱音を吐くものではない」という意識が邪魔をしてプライベートな悩みを相談しないのではなく、そうした悩みを他人に話すことで、自分への評価が変化したり、プライドが傷つけられたりすることが怖いから話さないのだと思う。男は、悩みを隠し、プライドを維持し、カッコよく生きたいのだと思う。(40歳代・既婚)

### ◆ 私的感情の抑制志向が弱いケース

- 私的な悩みは、信頼できる友人や妻にも相談してきたし、今後も相談していきたい。(20歳代・既婚)
- 個人的な相談は、対面ではほとんどしないが、フェイスブックやツイッターなどで、なんとなくつぶやくことで、友人から関心を持ってもらえ、元気が出てくることがある。(40歳代・既婚)
- 私的な悩みについては、友人に相談している。相談するなかで、相手からも相談を受けることもある。(50歳代・未婚)

## (6) 育児休業制度の利用

育児休業制度の利用について、職場では利用できる雰囲気にあるか、また、なぜ利用が進まないかについて、その理由を質問している。育児休業制度の利用については、主に以下のような意見があげられていた。

- 現在勤務する会社の育児休業は、男性でも取得できるようになっている。しかし、近い将来子どもが生まれる予定だが、取得するつもりはない。取得しない理由として、自分が育児休業を取得した場合に、現在の業務体制下では人員補充がなされないため、周りに迷惑をかけてしまうことが明らかであるためである。(20歳代・既婚)
- 転職したばかりであり、育児休業を取得できる状況ではない。実際に取得した男性社員は1日だけであり、社内では取得できる雰囲気にはない。(20歳代・既婚)
- 勤務先は、育児休業を男性が取得できる雰囲気はかなりあり、開かれていると思う。しかし、人事評価の時期になると、「育児休業を取得した社員がいなくても業務が円滑にできるよね」というコメントが出るなど、育児休業取得者が、取得後には「職場にいなくてもよい存在」と扱われてしまうことがある。こうした実態のため、「長期の育児休業は取らないほうが安全だ」とする意識が社員にはあると思う。(30歳代・既婚)
- 育児休業を取得した場合、業務体制を維持するために人員補充するケースはほとんどない。そのため、育児休業を取得されると、周りの社員への業務負担が増加するため、本当に嫌な顔をされる。(30歳代・既婚)
- 育児休業を取得できる雰囲気はあるが、実際に取得している男性社員は、業績が社内でもトップクラスであるなど、日ごろの劳いのためもあり、周囲も何一つ文句を言わない状況である。しかし、普通の社員に対しては、「業績を上げない社員は取るべきでない」とする雰囲気があることから、業績を上げて一定の地位を築いていなければ、育児休業を取得できる状況にない。(40歳代・既婚)

### (7) 老後の過ごし方

老後の過ごし方について、老後の楽しみや計画について、また親の介護に対する考えを質問している。老後の過ごし方については、主に以下のような意見があげられていた。

- 老後の過ごし方は、60歳までに自分の世界を確立することが重要であり、仕事一筋の生活になってはいけないと思う。趣味を持ち、友達を大切にしてきたので、老後もそうした過ごし方をしていきたいと思う。(40歳代・既婚)
- 妻や家族と楽しく過ごしていきたいと思う。それゆえ、最近は家族や妻を大切にするようになった。(50歳代・既婚)
- 老後を豊かに過ごすには、若いうちから趣味や仲間を持つことが重要である。妻と過ごすことも楽しみであり、友人たちとトレッキングなどして楽しんでいきたいと思う。(60歳・既婚)
- 老後に親の介護が発生する可能性があるが、そのことについて先日、両親と話し合いを持った。その際に、介護からくる親子関係の悪化を避けたいということから、介護は第三者に依頼することで、親も子も意見が一致した。その理由として、第三者に依頼すれば、お金を支払っているため親側の要望も子ども側の要望も依頼しやすく、親子関係も良好に保てると考えたからである。(40歳代・既婚)